

第二十七回 ウィングス小説大賞二次通過

『黎明の浜』

原稿用紙換算80枚

酒盛日和 著

昨夜は、ひどい嵐だった。

ろばのヨウに乗り、ロゼは早朝の浜辺に散歩に出た。嵐の後は、珍しいものが打ち上げられたりするのだ。

波打ち際に、大きな黒い塊。

「なんだろう」

ロゼは目を細め、相棒のビイーに話しかけた。

ビイーは、黒い塊めがけ駆け出した。

「うわん！うわん！」

早く来いと呼んでいる。

黒い塊は、漂流者だった。

ヨウは四つ足を折り、砂浜に座った。

ロゼは器用に腕の力だけで体を動かし、漂流者のにじり寄った。

昨夜の嵐では、命はあるまい。

脈を取り、胸に耳を当て、心音を確かめた。

「まだ息がある」

ロゼは、奇跡に感謝した。

「ビイー、急いでゴウザを呼んできて。毛布も。毛布だよ。お願い」

ロゼがビイーの背中をぼんと叩くと、ビイーは屋敷に向かって走った。

漂流者は、漁師や船乗の身なりではない。

身元がわかる手がかりはないかと、海水にくっしよりと濡れた衣服をあらためてみる。

肌身離さず懷に巻きつけられた書状を手にし、ロゼは眉をひそめた。

春とはいえ、早朝の海水はまだ冷たい。これ以上体温が奪われたら、命にかかわる。

ロゼは男の体を起こし、自分の着ていた衣服を彼に着せた。

間もなく、ビイーがゴウザを連れてやってきた。

「おはようございます。ロゼ様」

「早くから、ごめん。昨日の嵐のおかげで、こんな大きな拾いものをしちゃったよ」

ロゼが話す間も、ゴウザは手を休めない。

男の濡れた衣服を全部脱がし、毛布にくるんだ。

「重そうだからヨウに頼んで、ゴウザは私を頼む」

漂流した男は、大柄でがっしりしている。華奢なロゼの、ゆうに二倍の重さはあるようだ。毛布に包んでいるので、なおのこと運びにくい。

「ワシは大丈夫ですが、そのほうがよければ」

ロゼのお節介は、いまに始まったことではない。主人の悪い癖が、とんだことにならねばいいかと、ゴウザは思った。

毛布に包んだ男は意識もないのに、穏やかでない気配が漂っていた。必要以上に鍛えられた体から、この男が穏やかな生活とはかけ離れた生きかたをしているのが窺い知れる。

それを一瞬で嗅ぎ取ってしまうゴウザも、ただ者ではないのかもしれない。

「ヨウ、ちょっと重いけど、がんばって」

海岸から屋敷に続くならかな道を、ヨウが漂流者を乗せて歩いた。そして、ロゼはゴウザに抱きかかえられている。

ロゼは生まれたときから、足が不自由だった。

マイ スウィート ラバアー

レエツ メーク ラブ…

聞きなれない言葉の歌詞の歌を、誰かがご機嫌な声で歌っている。

暖かな日差しも、なんて心地がいいのだろう。目覚めるのが、とてももったいない気がする。

男はそこまで思いめぐり、がばりと飛び起きた。

「…うっ…」

左足を襲う傷みに、短くうめいた。

そして、まじかに人の気配を感じ、身構えた。

外人のように栗色の髪の毛をした若者が、椅子に腰掛けて男を見ていた。

外人のようなのは、髪の色ばかりではない。肌の色も白いし、目鼻立のつくりがくつきりしすぎている。

男は、沈痛な面持ちになった。言葉が通じるだろうか、心配になったのだ。

「…助けてもらったのだな。ありがとう。」

今日は、何月何日で、ここはいつたい…」

「今日は、三月十六日です。」

左の太腿の骨が、折れています。

しばらく、おとなしくしててください」

ロゼの声は、明るい日差のように暖かい。

先ほどの歌声の主らしい。

言葉が通じることがわかり、とりあえずほっとした。

「俺は、外国に流れついてしまったのか…」

「くす(笑) どうして、そうお思いですか?」

戸惑う男をよそに、ロゼはどこか楽しんでいる。アーチ形をした目が、とても穏やかな人柄を表している。

男は自分の置かれた立場を忘れ、ロゼの笑顔に見とれてしまった。

「私はロゼ。この屋敷の主人です。ここは南の離れ小島ですが、まだライス国ですよ。」

怪我が治るまで、ゆっくりとなさってください」

まだ二十歳にもなっていないそうもない若者が、この屋敷の主人だという。

若く見えるが、ロゼは二十五歳なのだ。

窓からの日差し、鳥の声。若い女の笑い声も聞こえる。

目に映る窓からの景色は色彩が鮮明で、飾られた花さえも嬉しそうに咲いている。

男は、まだ頭がぼんやりとしているのかもしれない。ここは、どこか夢心地がする。

「まるで南の楽園のようだ。ナハムートからは、遠いのだろうか」

ナハムートというのは、南部地方最大の港町のことだ。

「怪我が治るまでは、ここがどこでも同じですよ。」

旅のお方は、北のエリウスからやってこられたのですか? エリウスはつわもの揃いと聞いております

南領に、何のご用向きでいらしたのですか?」

命の恩人ともいえるロゼに対し、男は返事をする事ができなかった。

エリウスという言葉に、男は緊張を隠せなかった。

「エリウスにとってルーペンスは天敵でしたね。私などは、口も聞きたくありませんか」

エリウス地方とロゼの住むルーペンス地方とは、歴史的に埋められない確執がある。

「そうではない。ただ…うっ」

男は断固として否定した。その勢いに、足が痛み顔をしかめた。

「ごめんなさい……」

怪我人に対して気遣いに欠けたことを、ロゼは心から詫びた。

「長話は傷に障りますね。」

まだ熱もあります。ゆっくりと休んでください」

男が何も答えないのを気にしたふうもない。

「ご用があれば、このベルを鳴らしてください」

そう言い残し、ロゼは椅子に座ったまま移動し、部屋を出ていった。

ロゼが座っていた椅子の左右には車輪がついていて、手で椅子を動かすことができる仕掛けになっていた。

その奇妙な仕掛け椅子を見て、男はロゼが歩けないことを知った。

あんなきれいな顔をしているのに、足が不自由では気の毒なことだ。

男は、外国の物語を思い出した。

人魚の姫が、人間の王子に恋をした。

あれは、最後がかわいそうな結末ではなかったかと。

ロゼが去り、男は一人になった。

「離れ小島では、身動きが取れない。」

ロゼとやら、まんざら悪人でもなさそうだが。得体の知れぬところがある。

俺はこんなところで、寝ているわけにはいかないんだ」

男は、天井の絵を眺め、一人ごちた。彼の名は、クロー下。

骨折と海で遭難したことで、発熱している。

骨折したという左足が痛む。左足は添え木が当てられ、包帯でぐるぐる巻きになっている。

過去に、剣での傷は経験したことがあるが、骨折はない。

足が折れていては、歩けないのだろうか。歩けないということは、用足しにも自力で行けないということなのか。

ロゼの言った「ご用があれば」のご用に、クロードは思い当たった。

あの人魚の化身みたいなロゼに手伝ってもらって、用を足す姿を想像したら溜息が出た。

自分が果たさなければならぬ使命を思えば、のんびり療養しているわけにはいかない。

同じ船に乗っていた、部下の安否も気がかりだ。とりあえず、ぐるぐる巻きの包帯を取った。

左の大腿骨がやられている。紫色にはれあがっていて、かなりグロテスクだ。

慎重に床に足をおろしてみた。

「うっ」

痛くないこともない。要するに、痛い。が、歩けなくはなさそう。しかし、いつものようにはいかない。

まず用を足しに、トイレを探さなくてはならない。壁伝いにあるく姿に、情けなくなった。ゆっくりと歩いて、屋敷のなかを散策した。

「うわぁん！うわぁん！」

どこからともなく白い大型犬が現れ、クロードを見つけ吼えた。た。

「ビィー、どうした？」

ビィーの鳴声を聞きつけ、すかさずロゼが移動椅子で現れた。

「なにをやってるんですか！」

クロードは、ロゼに見咎められた。

「コウザ！早く来て！」

ロゼのあわてた様子に、クロードは多少申し訳ない思いがした。

「トイレを探しに……」

「ですから、ご用のときはベルで……」

小言を言うロゼも、男の下の世話をする自分を想像し頬を染め、それ以上は言わなかった。

咎めるロゼの言うことを聞かず、クロードは自力で用を足した。

その後、絶対安静を宣告され、おとなしくベッドに戻った。

足の骨が折れたからと、こんなところでゆっくりはしてられない。部下の捜索だけでもしなくてはならない。

あのビィーとかいう犬が邪魔だ。あの犬をなんとか黙らせなくてはならない。

「お食事をお持ち致しました」

クロードが思案をしていると、下働きの女が夕食を運んできた。

南地方特有の濃いめの顔立ち。肌は浅黒い。大きな黒い瞳の彼女は、見るからに健康そう。

「お嬢さん。よければ、名前を覚えてくれないか」
女はクロードに声をかけられ、給仕の手を止め頬を染めている。

「こほん」

クロードは一つ咳払いをした。

クロードには、下心などない。名前を知っていたらどうが便利だという理由で、聞いたただけだ。彼女が過剰に反応してしまった。

「誤解があったら、申し訳ない」

ハイビは、女より美しい容姿のロゼと、五十男のゴウザばかり見て暮らしている。わかってはいながらも、クロードの言葉にぼおくとほせ上がってしまった。

「わかっております。名はハイビと申します」

ハイビは、すぐに気持ちをたて直して答えた。

女性がクロードにうつとりしてしまふのは、その容姿ばかりではない。『たらしのバリトン』と、友人からよくからかわれる。

本人は自覚がないが、クロードの声はバリトンが効いていて、女を体の芯から蕩けさす魔力があるらしい。

ハイビも例外ではなかったということだ。

ハイビには気の毒だが、クロードは『たらしのバリトン』を有効に使うことにした。

「ロゼさんはどうした？」

ハイビの瞳をじつと見つめ、クロードは話しかけた。

「ロゼ様はお出かけでございます」

ロゼの不在をクロードには知らせるなど注意されていたのに、ハイビはつい漏らしてしまった。

「いつごろ帰るか聞いていますか？」

「さあ…知りません」

「ビイーという犬は？」

「ビイーは、いつもロゼ様と一緒にです。」

あとう

クロードの質問攻めに、これ以上しゃべるのはまずいと思っただ。

「悪かった。せつかくの食事がさめてしまうな。」

うまそうだ。ハイビが作ってくれたのか？」

「はい」

ハイビの顔が明るくなった。

夕食を食べたら、急に眠くなった。

食事に、解熱剤や安定剤が混ぜられていたのだ。

クロードが目覚めたころには、すっかり夜が更けていた。屋敷中が、眠っている。

下働きの数は少ない。ハイビ以外は、通いの者だ。特別な用がなければ、ハイビは十時には消灯する。

夜になっても、ロゼは帰ってこなかったらしい。

クロードは、ビイーに発見されず、屋敷から出た。庭の木を折り、杖にした。

外に出て眺めると、クロードが寝ていた屋敷は、平屋でそう大きくない作りだった。

外に出てみてもう一つわかったことがある。こここの敷地はとてつもなく広い。離れたところに二階建ての大きな建物が見える。

クロードがいたところは、離れの一角にすぎなかったのだ。

ロゼはこの屋敷の主と言ったが、屋敷全体のなのか、離れの一角だけのなのかはわからない。屋敷全体の主なら、たいしたものだ。あの足では、離れの主ということだろう。

星を見上げ、方角を確認する。星の位置が、クロードの生まれ育ったエリウス地方とは違う。

波の音が近い。海の匂いに、鼻を効かす。

浜に出て、船を捜そうと決めた。

月明かりをたよりに、屋敷の裏に回ると浜に出られた。

屋敷専用の棧橋がある。帆船が舳い綱で繋がれていた。

足は使い物にならないが、腕は無傷だ。星の位置から、

ナハムートからさほど離れてはいないことがわかる。少し

北に向かって進めば、当初目指していたナハムート港に着けるはずだ。

クロードが舳い綱をはずしにかかったとき、ビイーが船に飛び乗ってきた。

「またおまえか。邪魔するな」

「ううう」

ビイーは、歯をむきだしクロードを威嚇している。

クロードは近くにあったロープを咄嗟に手にし、ビイーと対峙した。一瞬で仕留めなければ、負傷した足では苦戦するかもしれない。

目にも止まらぬ速さで、クロードのロープがビイーの首を狙う。狼が得意なクロードには、自信があった。

しかし、ビイーの速さがクロードを上回っていた。大型

犬とはおもえない俊敏さだ。

クロードの一撃をなんなくかわし、クロードにたいあたりをくわす。

普段のクロードなら踏みとどまることができただろうが、いまは足を負傷している。もちこたえることができず、その場に尻もちをついてしまった。

ビーの犬歯が、クロードの頸動脈にあたっている。

「ビー、ストップ！」

ロゼの一言で、クロードの命はつながった。

ロゼの命令に従い、ビーはクロードから離れた。それでも、クロードがいつ反撃にでも対応できるように、ビーの構えには隙がない。

「信じられません。こんな足で、なんて無茶をするんですか」

「ロゼこそ、こんな夜に一人で船に……」

「ビーとヨウがいてくれれば、ほとんどのところは大丈夫なのです。」

船を出すといつても、すぐ隣の島に行っていただけです。庭のようなもので、目を瞑っていても大丈夫です」

船内では移動椅子に乗っていたロゼが、ヨウに乗り船を下りようとしている。

ロゼが自由に動ける範囲は、せいぜい屋敷内だけだと思っていた。クロードは、ロゼという人物を低く評価していたようだ。

「私は怒ってるんですよ」

ロゼが怒っているといっても、あまり迫力がない。

ロゼは怒っていると言いながら、少しもとげとげしさが無い。心の穏やかさが、すべてを覆ってしまう。ロゼの本質なのだろう。

人間の理想のありかたが、ロゼの姿に重なったように思えて、クロードは微笑ましくなった。

「もう本当に！ちよつとは、反省してください」

クロードは、再びベットにつれ戻された。

「おとなしくできないのなら、ベットに縛りつけますよ。」

せつかく下がった熱が、ほらこらんない」

クロードの額に手を当てて言うロゼは、心底憤慨しているようだ。

添え木を当てる作業の手つきが、いささか荒っぽい。

「おとなしくしてると、約束できますか？」

ロゼは腰に手を当て、クロードに言った。

「ロゼには、本当に感謝している。だが、約束はできない。勝手なことを言っているのは、百も承知だ。」

「訳あって、名乗ることもできない…」

「何も聞かずに、俺のたのみを聞いてくれないか」

クロードは、懇願した。

「名前など、いくらでも偽れるというのに」

「ロゼに…嘘は、つきたくない」

クロードの不器用な誠実さが、ロゼには嬉しかった。

「旅のお方の誠意に免じて、できる範囲でお力になりましょう。」

ですから、無茶はしないと、約束してください。今、無茶をすると、元どおりに治らなくなってしまう。せつかく神様から頂いた、立派な体なのですから」

他の誰かが言えば説教臭い言葉も、ロゼが言つと素直に染み込んでくる。

「…約束は…、できないかもしれない」

「ほんと、嘘でも約束すると言えばいいものを。馬鹿正直は、損をすると相場が決まっています」

ロゼの口調は、なじりながらも優しい。

クロードの表情は、相変わらず険しい。

「怖い顔。そんな怖い顔をしてると恋人に嫌われてしまいますよ。奥方かな」

「恋人も妻もない。別に女性にもてなくてもかまわないし」

「せつかく男前なのに、もつたいない。私があなたみたいだったら、いっぱい恋をするだろうに。ハイビはいい子でしょ」

これは、ロゼの本心だった。

どうしてここでハイビの名前がでるのか。ロゼと話しをしていると、いつの間にかはぐらかされてしまう。

ロゼののんびりした雰囲気は、南部地方の風土なのか。ロゼ、独特のものなのか。

クロードは、無骨な土地柄のエリウスに思いをはせた。

ライス国は、大海に浮かぶ南北に細長い島国。世界的な規模からすれば、取るにたらない場所だ。航海技術の進歩のため、辺鄙なこの国の事情が変わってきた。

北部は緯度が高く、寒く痩せた土地が多い。中央は、穏やかな気候で、穀倉地帯が広がっている。南部には無数の島が点在している。

クロードが流れ着いたのは、南部に点在する島のうちの

一つ。

この島国は、約二百年前に群雄割拠の時代を迎えた。中央に領土を持つライス王家が覇者となった。北部のエリウス王家は北部地方に、南部のルーペンス王家は南部地方に、ライス王家から領土を賜り家臣に下った。

二百年前、事実上、天下を分ける三つ巴の合戦があった。北と南は手を組んで中央をたたく作戦だった。中央を潰し、全土を二分する計画だったのだ。

中央の外交に丸め込まれた南が、北を裏切った。北は領土を激減させられ、貧しい北部の土地に追いやられた。そして、南はといえば、ぬくぬくと南の土地に安座しているのだ。

北の恨みは、中央のライス王家に対するよりも、ルーペンス家に対するほうが今も根強い。

「ロゼのお身内は、この地方屈指の貴族だと思っただが」さきほど海辺まで出る間に、クロードは気がついたことがいくつかある。

ロゼの住む屋敷の敷地は、とてつもなく広い。建物や庭の様子から、ロゼの暮らしぶりはかなり豊だ。この地方でも、片手の指に入る家柄ではないか。

「南侯に会ってだてはないだろうか」

「南侯に会って、どんな用向きなのですか？」

北の人間が南侯に会いたいだなんて、穏やかではありませぬ。

北の人々は長い間、南を恨んでいるのですよ」

ロゼは、砂を噛んだような顔をしている。

「ロゼに、心配顔は似合わない」

クロードは、ロゼの頬に手を伸ばして撫でた。

ロゼの頬が、急に熱をもった。

「今は何も言えないんだ。何も聞かないでほしい」

なにも聞かずにと約束はしたものの、あまりな身勝手な言い分に、クロードは自分自身に腹が立った。

「わかりました。南侯に会えるようにしましょう。見かけによらず、これでもけっこう人脈があるんです」

ロゼはアーチ型の目で、ウインクをした。

「でも、それは、あなたの足がもう少し治ってからです」

「俺には、のんびりしてる時間がないんだ。足なんかちぎれてなくなってもかまわない。早く、南侯に会わせてほしい」

「私の条件は変わりません。完治するまでとは言いません。」

せめて、杖をついてでも歩けるようになるまで。

あなたが治療に専念するか、南侯に会うのを諦めるか決めてください。

他所者が南侯に会おうとして、そうやすやすと叶うものではないということをお忘れなく」

クロードは、立场上、過去に数多くの修羅場をくぐり抜けてきた。逸材と呼ばれる人物と、一步も引けを取らず交わってきた自負がある。

なのにロゼを前にすると、押しているつもりでも、最終的に押されてしまっている。

南国で悠々自適に暮らす、ロゼという人物の力量を計りかねていた。

ロゼとの約束を履行するため、クロードは日夜治療に専念している。

治療といっても、骨折の場合は、日にち薬だ。

毎日、ロゼとのんびり南国の生活を満喫している。あせりがないわけではない。今の自分にできることをやるのみだ。

クロードとロゼの日課は、朝の食事から始まる。

「おはようございます」

ハイビが元気よく、皆に朝の挨拶をする。

「おはよう、ハイビ」

クロードは例によって『たらしのバリトン』を披露している。

「おはようございます。エリー様」

ハイビは満面の笑みで、クロード個人に挨拶を返した。

名は名乗れぬというクロードを、ハイビは勝手に『エリー』と呼んでいる。エリウスから来たから、エリーだそうだ。

「夕べはよく眠れましたか？」

ハイビ特製枕の威力はすごいでしょ」

「ああ。絶妙な高さだ。ありがとう」

ハイビが、クロードの身の回りの世話をしている。若者同士、うちとけるのが早い。

ハイビはまるで世話女房になったような気分で、まめにクロードの世話をしている。今も、主人であるロゼのことなど、目に入っていないみたいだ。

打ち解けている二人の様子を横目に、ロゼは急に食欲がなくなっただけがした。

ロゼは食べ物の好き嫌いや食べ方は、人を計る物差しだ
と思っている。

クロードは、食べ物に好き嫌いが無いようだ。出された
ものは、何でも美味しくそうに食べる。クロードの食べつ
ぶりを見ていると、ロゼまで食欲が湧いてくる。

ロゼはクロードと食事をするようになって、食事の本当
の楽しさを知った。食事の時間が、待ち遠しくてならなく
なった。

ロゼは、家族で食卓を囲んだ記憶がない。家庭を持つつ
もりがないので、これから先も家族団欒を楽しむことはな
いはずだ。

ロゼがもくもくと手を動かしているせいで、いつも弾む
はずの食事中の会話が今日は無い。

気まずさついでに、クロードは気になっていたことを聞
いてみることにした。

「この白い液体はなんだ？」

毎朝食卓に並ぶ、えも言われず生臭い、白濁の物体の正
体を尋ねた。

「ミルクです。骨によいといわれている飲み物です」

ハイビは、模範的に答えた。

「みるく？聞いたことがないな」

さらなるクロードの問いに、ハイビはロゼの顔をうか
がった。

「牛の乳です」

ロゼの答えに、クロードは今飲んだ物を吐き出したく
なった。

「北では、牛の乳は飲みませんか？」

ロゼはすつとぼけて、聞いてみた。

実は、南部でも、古来から牛の乳を飲む習慣などない。

よほど喉が乾いていたとしても、牛の乳と聞いて口にする
者はまずいない。

ロゼは、牛乳の栄養分が骨にいいことを知っている。骨
折しているクロードのために、無理をしているのを顔に出
さず飲んでいた。

クロードとハイビの仲の良い様子を見ていたら、そんな
努力がばかばかしく思えてしまった。

どうせ飲むなら、クロードにも同じ思いをしてもらおう
と意地悪な気持ちになり、ミルクの正体をばらした。

むきになって意地悪をしてみましたあさましさに、ロゼ
は自己嫌悪が募った。

「所変われば、食事もこうも変わるのだな」

ロゼの落ち込んだ気持ちなど気がついていないクロードは、ミルクを一気に飲み干した。口の回りに牛乳が髭のようについている姿が、とても滑稽だ。

ここでの食事のメインは、魚が多い。朝から甘ったるい果物が、食卓に並ぶ。

「エリーは、出されたものは何でも食べてくれるから、料理のしがいがあります。」

最近のマイ・ブームは料理です」

ロゼはたまに聞きなれない、外国の言葉を使う。「マイ・ブーム」も、その一つだ。意味はわからないが、だいたの想像はつく。

「これ、ロゼが作ったのか？」

クロードは、大発見をしたかのように驚いた。

「ロゼ様は、創作料理の天才ですからもう」

ゴウザが目を細めて、主人の料理の腕前を誉めた。

身分制度の厳しいこの時代に、主従が食卓を共にするなど考えられないが、ここではそれが当たりまえのようだ。

ロゼとゴウザは歳の離れ具合だけでいえば、親子のようだ。その外見は、とても親子には見えない。人魚姫のようなロゼに対し、ゴウザはたこ入道みたいだ。

ゴウザの役職を、一口で説明するのは難しい。

ロゼの家臣であり、用心棒であり、お世話役であり…。要するに、ロゼのなんでも係だ。

「この果肉をくりぬいたところに生の魚を詰め込んだのも、ロゼの創作料理なのか？」

俺はてつきり、この地方の郷土料理だと思っていた」

見た目はきれいな配色なのだが、味のほうはどうも複雑な代物だ。

「そうですよ」

ロゼの目が急にキラキラし始めた。さっきまでのささくれた気持ちが、嘘のように吹っ飛んでしまった。

「今夜の食事も楽しみにしててください」

ロゼは、自信満々に片目を瞑ってみせた。

ちなみに夕食の献立は、ロゼが昨夜から仕込んだというカライというメニューだった。

あらゆる野菜に、ありったりの香辛料を使って煮込んだものだった。

「目から火が出そうですね」

と、ゴウザはさも美味そうに食していた。
クロードは、不覚にも失神しそうになった。

クロードが生まれ育った北のエリウス地方を思うと、こ
こはまるで楽園のようだ。
三月だというのに、日中だと半そで一枚で快適だ。
左足骨折くらいで、じっとしてられるクロードではな
い。

予備の移動椅子を借りて、動き回っている。
なんなく乗りこなしているロゼを見て、高をくくってい
たが、これがなかなか難しい。腕の力もいる。

運動神経がよく、鍛えているクロードでなければ、こ
も早く乗りこなせなかつたはずだ。

クロードが生活している屋敷は、ロゼの屋敷全体からみ
れば、離れのほんの一角にすぎない。

ロゼの屋敷は、足の不自由な彼が移動椅子で動きやすい
ように、段差がなく作られている。合理性を追求した、す
こぶる快適な住居だ。

ロゼはそのせいで、足が不自由なのをまったく感じさせ
ない生活ぶりをしている。たまにゴウザに抱かれている姿
を見ると、足が不自由なのだと思いつくくらいだ。

長い間クロードは、上級貴族にはろくな人間はいないと、
頭から貴族階級を軽蔑していた。ロゼという人物に出会い、
考えを改めさせられた。

ロゼに感服してばかりでは、おもしろくない。ロゼがで
きる自分が自分にできないはずがない。クロードは騎士の
意地と面子にかけ、できるだけ人の助けを借りずに過こし
ている。

療養中のクロードとは違って、ロゼは案外忙しらしい。
移動椅子で行けないところは、ろばのヨウで移動し出かけ
ることも多い。りこうなビイーは、介助犬の役目もしてい
る。人間の言葉をかなり理解するのには、驚きだ。

クロードを見るビイーの目つきは鋭い。「おまえなど、い
つでもかみ殺してくれる」と言われているようで、冷や汗
がでる。

クロードは、移動椅子で庭に出て芝生に寝ころがってい
たら、いつの間にか眠ってしまった。

何者かが近寄る気配に、飛び起きた。

「驚かすなよ」

クロードの昼寝の邪魔をしたのは、天敵ビイーだった。

「めずらしいな。ロゼと一緒にじゃないのか？」

ロゼは、昼食にも顔を出さなかった。

ビーが振り向いた方向に、ロゼの姿があった。

本館から移動椅子で、クロードのいるところへとやって来る途中だ。

「あっちに行ってたのか」

「ええ…」

「どうしたんだ？」

「えっ？」

「なんだか、疲れた顔をしてるぞ」

ロゼはクロードの言葉に、返事のしようがなかった。

クロードも、無理に聞こうとはしない。

北の地方より鮮やかに青い空から降り注ぐ太陽の光に、クロードは目を細めた。

「俺が目覚めたとき、歌ってた歌覚えてるか？」

ロゼは、一瞬、どんな歌だろうと、首を傾げた。

「外国の歌だと思うのだが」

マイ スウィート ラバー

レエツ メーク ラブ…

ロゼが外国にいたときに覚えた俗歌のことだと思い当たり、頬を染めて俯いた。

「心当たりがありません」

「嘘だ。今、思い出したぞ」

「いいえ」

「うゝそゝだ！」

白状しないと、この嘘つきな口をつねるぞ」

クロードはロゼの移動椅子の手すりにつかまって立ち上がり、ロゼの口を手をかけた。

「うゝゝわん！」

ロゼのピンチに、おとなしくしていたビーが吼えた。

「ビーに加勢させるなんて、卑怯だぞ」

「そんなにのしかかっては、危ない。うわあゝ」

言わんことはない。クロードが調子に乗りすぎたせいで、

ロゼは移動椅子ごとクロード共々ひっくり返ってしまった。

移動椅子ごと頭からひっくり返るなど、初めての体験だった。

「もっ、クロード。あははは」

さっきまで浮かない顔をしていたロゼが、この状態に笑っている。

ビーはこの奇妙な状態を、大の大人がじゃれ合ってい

るのだと判断した。木陰に移動して、芝生に伏せて目を閉じた。

「毎日が楽しそうでございますなあ」

ロゼが楽しそうにしていると、ゴウザも楽しくなる。一見敵つい顔つきをしているゴウザの目じりの皺が、めっきり深くなっている。

ロゼの今の立場を考えると、目を細めてばかりもいられない。

「エリー殿のお相手もよろしいですが、現場のほうからお仕事の催促がひっきりなしでございます」

「わかっている。ゴウザにはかり仕事押し付けて、悪いと思ってる」

「それはかまいませんが……」

根がお節介やきのロゼだが、クロードに対する肩の入れようは尋常ならざるものがある。老婆心ながら、ゴウザは心配でならない。

二日間、ロゼが留守をするという。

ロゼは出かけ際、退屈するだろうクロードに書庫を案内した。

「本は好きですか？ よければ、好きに読んでください」

この屋敷の中で、一番大きな部屋に違いない。そこには、膨大な本が並んでいた。

本のタイトルを眺めるだけでも、一仕事だ。ジャンル別に、整理整頓されている。本の種類は多岐にわたっている。

外国の文字で書かれた本の多さに驚かされた。

島国であるこの国で、なぜこんなに外国の本が手に入るのだろう。エリウス城にも、これだけの本は揃ってはいないはずだ。

クロードは、そのいくつかを手に取り、めくってみた。

書かれている内容はわからないが、挿入の絵から外国の進んだ技術がうかがい取れた。

クロードは、朝からずっと書庫にいた。

「夕食をお持ちしました」

「ありがとうございます」

ハイビへの礼もそこそこに、クロードはすぐ本に目を戻した。

「読書には最適な、サンドイッチです」

クロードは読書に夢中で、昼食を一口も手につけていな

かった。

「もう、ロゼ様と一緒になんだから」

「ロゼは、すごい読書家なんだな」

食事には目もくれなかったクロードが、ロゼの名前には反応した。

「ロゼ様は、読書家というよりは、活字中毒」

エリー様って、ホントい・け・ず。エリー様と話していると、結局、ロゼ様の話しになってしまっただもん」

「そうかなあ…」

「そうですって」

ハイビは、頬を膨らませた。

「サンドイツチなら、本を読みながらも食べられますかね。ちゃんと食べてくださいよ」

「すまないな。ありがとう」

クロードは、礼を言った。

「後片付けが簡単なんです」

明りを持ってくるころまでには、食べてくださいいな」

「わかった」

読書三昧というより、本来のクロードは体を動かすほうが好きだ。それが今は何かに取りつかれたように、本にぐいっっている。

貪欲に知識を吸収することに、全神経を集中させている。脳が海綿体になっている。

特にクロードの気を引いたのは、武器や兵法について書かれた本だ。

「ロゼには、全部とは言わないが、これだけの知識が詰まっているのだろうか…」

クロードは、ロゼという人物が今まで以上にわからなくなった。貴族だが、あの体だ。たいした仕事はしていないはずだが。

二日ぶりにロゼが戻り、屋敷にまた華が戻ったようだ。

「おはようございます。退屈ではありませんでしたか？」

ロゼは大きなあくびをしながら、朝の食卓についた。

「朝から大口あけてのあくびなど、はしたないですぞ」

お世話役も兼ねているゴヴサが、ロゼの行儀の悪さをたしなめた。

「エリー殿も、本を読みながらの食事は、関心いたしませんな」

クロードはこの二日間、ほとんど眠らずに本を読んでいく。

本の霊に取りつかれているようだ。気力だけが彼を支えている。

本を読んでいると、ロゼのことも思い出さない。今も、ゴウザの声すら耳に入らなかつた。

ロゼはゴウザに向かつて首を振った。

今のクロードには、何を言っても無駄だ。

「外国の言葉がわからないのがもどかしい。ロゼ、教えてくれないか」

「外国の言葉を学ぶには、時間がかかります。時間の許す限りで、なんなりと」

ロゼの表情は嬉しそうであり、それ以上に淋しそうだった。

ロゼが屋敷にいるときは庭でごろごろしているビーの姿が、見あたらない。

「ロゼは、出かけたのか？」

クロードは、庭でゴウザを見かけたので聞いてみた。

「あちらで、お客人と会っておいでです」

ゴウザは本館のほうを振り向いた。

「あっちに行ったあとは、いつも疲れて帰ってくるな」

「お客人と会つと、気疲れされるのでしょうか」

クロードは、ゴウザの言葉がピンとこなかった。ロゼは、社交的だ。人と会って、気疲れするのだろうか。

「ロゼ様とて、生身の人間ですぞ」

ゴウザの言葉に、クロードは頭を殴られた思いがした。

浮世離れでひょうひょうとしているロゼは、儂げな第一印象とは裏腹に、どこか不死身なように錯覚していた。

あれだけ体にハンディがあるのだ。負担がかからないはずがないのだ。

「読書は一休みですか？」

ゴウザは、庭につくられた小さな畑の土を耕していた手を休めた。

首に巻いたタオルで、額の汗を拭っている。

「ハイビに、図書室の掃除ができないと、追い出されました」

「ははは……。ロゼ様の図書室ごもりが続くと、ハイビがよく使う手じゃ。部屋の中ばかりいては、体によくない」

クロードは、ポケットから一冊の本を取り出した。

ロゼが整理した、外国語辞典だ。

「これ一冊でも、すごい代物だ」

クロードは、ロゼの偉業を絶賛した。

「ロゼは、外国に行ったことがあるのだな」

ライス国では、外国との交流を禁止している。許可なく海外に行ったとなれば、禁を犯したことになる。

「生まれつき足がお悪くてな。お父上が、外国の進んだ医学で治せないものかと、小さいころから各地を転々となさった」

「ゴウザは、そのときから？」

「ロゼ様は、ほんにかわいいお子で。ワシは、二十五歳じゃった。髪もふさふさしておったわ」

ゴウザは、子供のころのロゼを思い出したのか、懐かしげに微笑んでいる。

「ゴウザ。おまえはロゼの下僕のような仕事で満足か？」

外仕事が多いのか、ゴウザは真っ黒に日焼けしている。今も土いじりをしている。「くあたりまえの光景に、クロードは何故か違和感を感じているのだ。」

「ゴウザは鍬を持つより、大剣を持つほうが似合っているはずだ」

「ははは、何をおっしゃいます」

ゴウザは、クロードの言葉を一笑に伏した。

「どうして…、俺は真面目に話しているのに」

クロードの真剣な表情に、ゴウザも顔つきが変わった。

「剣を持つだけが、騎士の道ではござらん。」

ロゼ様にお仕えして、ワシはようわかった」

人生五十年。それが、ゴウザの出した哲学だ。

「俺の目に見えなければ、おぬしはかなりの剣の使い手だ。鍬を持って土をいじっているより、仕官したらどうだ。」

仕官するつもりがないのなら、俺に仕えぬか」

ゴウザは、突然のクロードの申し出に驚いた。

「お言葉は嬉しいですが、ワシの一生はロゼ様のためにある」

その言葉には、ゴウザの信念が宿っていた

ロゼは夕食の時間には、戻ってこられなかった。

寝るにはまだ早い宵のくち、ロゼはワインを運び、クロードの部屋を訪れた。

「一杯、付き合ってくださいませんか」

今夜のロゼは、どこかしんみりしている。

「喜んで」

「体を鍛えている人は違えますね。これ以上待ったをかけ

ると、今度こそとんでもない無茶をしそうですね。

明日、南侯に会えるよう、手配しました」

「ロゼは、占もやるのか？」

「どうしてですか？」

「足もだいぶよくなった。今夜あたりロゼに催促しようと思っていたところだ。」

本当に、感謝してる」

クロードはロゼの両手を握り深々と頭を下げた。

「感謝だなんて……。約束ですから」

紅色のワインの入ったグラスを、クロードにすすめた。

「酒を飲むのは、初めてだな」

「そうですね」

渡されたグラスを、クロードは少し上げ、

「何に乾杯しよう」

と、ロゼに問いかけた。

「では、エリー殿の健闘を祈って」

「乾杯」

二人のグラスが重なった。

翌日、朝食の前から、クロードはロゼに起こされた。

「南侯様におめもじするのだから、この身だしなみをなんとかしなくては」

ロゼは、ハサミと剃刀を持って現れた。

「もしかして、ロゼが散髪するのか」

「そうですよ。私は自分で自分の手入れをしています。エリーも、ご自分でできますか？」

自主自立の精神を重んじてきたクロードも、自分で自分の髪を切ったことはない。髪結い職人に手入れしてもらってきた。

「ロゼはそういう髪型だからいいが、俺は短いから……」

「心配いりません。ひげもきれいに剃ってあげます」

シャボンの泡をクロードの顔に塗り、剃刀をあてていく。

「ちよっと、待った！ハイビは？」

「残念でした。ハイビは休暇を取って、実家に帰っています。」

ほら、観念してください。危ないから、動いては駄目」

「ちよっと、待て。くすぐりたい。鏡を貸してくれば、

ひげは自分でできる」

くすぐったさのあまり、クロードの体が引ける。

移動椅子なしでも動けるようになったクロードは、ロゼ

よりずっと自由がきく。ロゼから逃げるのは簡単だ。

ロゼの用意した衣装に身を包むと、クロードの男前が一層あがった。

「娘さん達の心を惑わさないよう、気をつけてくださいね」

ロゼは、本気とも冗談ともとれる忠告をした。

「どうしてそうなる？」

「最近のハイビったら目がハートマークで、仕事が手につかず困っています。うぶな子を惑わした責任は重大ですよ。」

「ロゼと話していると、どこまでが本当でどこからが冗談なのかわからなくなるよ」

「ここでのことは、全部ひと時の夢……」

自分に言い聞かせるように、ロゼは言った。

ロゼは大切なことははぐらかしてしまうのだと、クロードは短い付き合いのなかでも感じとっていた。

「ありがとう」

クロードは、素早くロゼの頬に、感謝のキスをした。

ロゼの屋敷のある島から南侯の住む居城は、クロードが思っていたより近かった。風向きが良ければ、三十分かからない。

南侯の居城のあるナハムートの町は、活気に満ち溢れていた。

港には大型船が、何十艘も繫留されている。

船に積荷を運ぶ者。降ろす者。大勢の人が集まり、行き来している。

港から大通りに出れば、いろいろな種類の店が所狭しと軒を並べている。

クロードは自分が住んでいるエリウスとの、あまりの違いを目の当たりにした。

足がまだ完全に治っていないクロードは、貴人が乗る輿で町を移動している。それも、全部ロゼが手配してくれたことだ。

クロードはロゼから渡された招待状を持って南侯城を訪れた。クロードの身分は、ロゼの遠縁ということになっている。

すぐに南侯に会えるわけではない。まずは、宰相に会う手はずになっている。

どこでも役所仕事というのは、手間ばかりかかる。クロードが宰相に会えたのは、日も傾きかけたころだった。

「待たせた。おぬしのごとは、ロゼから聞いておる。
なんなりと、申してみよ」

南侯の懐刀、ノウザン宰相。武人としても、文人としても、優れた人物としてその名は高い。

「わたくし、北侯の密命を受け、南侯に海路でやってまいりました。クロード・シベリウスと申す者」

「シベリウス家といえば、北侯でも古豪の家柄。気骨の武人が多いと聞くが。」

そのシベリウス家の者が、北侯の密命といえば、穏やかではないのう」

「いかにも。船旅の途中嵐にあい遭難致しました。ロゼ殿に助けられ、一命を取りとめた次第。」

そのとき北侯からの密書もなくしてしまいました。ですから、真実を証明するものはなにひとつないのです」

クロードは必死に訴えた。ノウザンとて、この青年がはなからデマを言っているとは思ってはいない。

「貴殿の気持ちもわからないではないが、密書がなくては話にならん。」

一度国元に帰り、出直してはいかかがか」
ノウザンの言うのが、当然の理屈だろう。

「時間がないのです。ここでこうしてる間にも、大勢の民が飢えて死んでいく。」

ルーペンスは豊かな国だから、あなたにはわからないかもしれないが…。

子供や年寄り。弱いものから死んでいくのです」
クロードは故郷の悲惨な風景が目の奥に浮かんで、涙が出てきた。

「北はかなりひどい状況だと、報告を受けている」
語るノウザンの口調も、同情のいろが濃い。

「血気にはやった者達が暴動を起こしては、政府軍になぶり殺されていく。」

足の怪我で、無駄に時間を過ごしてしまった。国元に帰り戻ってくる間にも、死ななくてもいい人々が命をおとすて…」

クロードは、涙でその先が続けられなかった。

クロードは必死に国の惨状を訴えたが、ノウザンは聞く耳を持たなかった。

「悪いことは言いません。北侯からの密書なく南侯にお目通り叶ったところで、結果は同じです。北侯の密書なり、正式な使者と証明するものをお持ちなさい。」

「ご希望なら北への船を出して、お送りしますぞ。それとも、他にあてでもおありかな」

結局、クロードは南侯に会えず、城を後にした。

クロードとノウザン宰相の会話を、ついたての向こうで聞いている人物がいたことを、クロードは知らない。

「兄上はどうした。今日の二時にと、言っただけははずだが」

「申し訳ございません…、まだお帰りになられなくて」

「困ったお人だ」

「まったく。それにしても、みごとな若者でございますな」

「ノウザン。そんなことを言っても、私の機嫌は直らないぞ」

「はっはあー」

ノウザンは、目の前の人物に平伏した。

クロードは、ロゼがナハムートの町に取ってくれた宿に向かった。

意気消沈したクロードを、ロゼは例の天真爛漫な笑顔で迎えた。

「そのお顔では、上手くことが運ばなかったのですね」

ロゼの問いには答えず、クロードは上着を乱暴にベットに投げつけた。無念さのあまり、血がでそうなほど唇をきつくかんでいる。

「ご用がすんだのなら、国に帰るのですか？」

ロゼは、どこか淋しそうに尋ねた。

「町に出てくる」

クロードはさっき投げつけた上着に袖を通し、町に出るしたくをした。

「まだ無理は禁物ですよ。できるだけ早く、帰ってきてください。夕食を一緒にしましょう」

ロゼは、このままクロードが帰ってこない予感がした。無理にでも約束を取りつきたくて、夕食の約束をした。

「わかった」

クロードの返事に、ロゼはほっと安堵した。

「ゴウザ、クロードの護衛をお願い」

クロードが外出した後、ロゼはゴウザに指示を出した。

クロードが帰ってきたのは、夜の十時をまわっていた。どこの店で酒を飲んだのか、顔が少し赤い。

「お帰りなさい」

ロゼは心から、そう言った。

「食事はまだか？」

「約束しましたから」

「遅くなって、すまん」

クロードはぶっきらぼうに謝った。まだ、虫のいどころはよくないらしい。

「ゴウザ、スイメイ亭に席を設けて」

「承知しました」

スイメイ亭というのは、この町でも屈指の名店だ。その店の最上階の個室で、ロゼ達は遅い夕食を取ることになった。

竜宮城に迷い込んだのかと思ってしまう。店内は、まるで魔法がかりのようだ。

部屋の調度品の一つ一つが、馴染みのない異国風だ。テーブルにセットされた食器も舶来物らしい。

「どうぞ」

ロゼは、ビードロのグラスに紫色の酒を注ぎ、クロードにすすめた。

クロードはさっき町で、安酒を浴びるように飲んだ。いい加減酒はもういいと思っていたが、ロゼにすすめられると、つい手が出てしまった。

「ナハムートの町は活気があるな」

グラスの酒を一気に飲み干し、クロードは言った。

「南侯で一番大きな町ですから」

「北と南のこの違いは、いったいなんなんだ」

「先代の南侯様は、希代の名君でしたから。」

港を整備し、農耕以外の産業にも力を注ぎました。結果、国は豊かになりましたが、政府からの弾圧も厳しく、死を賜ることになりました」

ロゼは先代南侯を偲び、その偉業を称えた。

「武力だけでは、民を幸せにすることはできないと思います」

「ロゼの言うとおりかもしれないな」

「ルーペンスは、昔から海上貿易で栄えた土地柄。口八丁手八丁の商人の民。」

それに比べエリウスは、武門の誉れ高い民。

自ずとたどる道は違います。

それでも、願いは同じ。民の平和な暮らしです」

「そうだな」

ロゼの言葉に、クロードの逆立った感情が癒されていく。

部屋の外が騒がしくなった。

「待ち人来れり」

ロゼは、クロードに微笑んだ。

仰々しく部屋に入ってきた人物は、身なりからしてかなりの高位の者らしい。

「着席の無礼をお許しくださいませ」

足の不自由なロゼは、客人に詫びた。

「今宵はお忍びじゃ。堅いことはなしでまいろう」

四十歳を超えているだろう客人は、手に持った扇子を口元に当てて言った。

典型的な上流階級の匂いがする。

「こちらが、南侯であらせられる」

ロゼの言葉にクロードは、狐につままれた思いがした。

「南侯に会わせると、約束したのをお忘れですか？」

南侯を呼びつけるなど、ロゼのような一介の若者のどこに、こんな強力なコネがあるのか。クロードは気になったが、考えるのは後にした。

クロードは、今日南侯城で宰相ノウザンに話したのと同じことを、南侯に訴えた。

「ふむふむ。そちのいうことは、もっともじゃ」

南侯はうなずきながら、クロードの話を聞いている。

途中、酒で喉を潤すのは忘れない。

熱心に話すクロードは、あまりの手応えのなさに、弁に熱が入らなくなってきた。まだ、ノウザンに話していたときのほうが、手応えがあったような気がする。

南侯が手元の料理に手を伸ばしたときだった。

屋根を伝ってバルコニーから、黒装束の刺客が侵入してきた。

「ひえー」

南侯は奇声を上げ、椅子ごと後ろにひっくり返った。

「南侯をお願いします」

ロゼはそう言い、護身用の短剣を抜いた。

クロードはひっくり返っている南侯をテーブルの下に押しこんだ。ロゼのことも気がかりだ。

刺客はいつせいに、襲い掛かってきた。

クロードはテーブルの上の料理の盛られた大皿を、惜しげもなく円盤のように、刺客の顔面めがけて正確に投げつけて行く。

手練た刺客は、難なくそれをかわす。

刺客の数は全部で五人。クロードに二人、ロゼには三人と、二手に分かれた。

ロゼは護身用の短剣を、刺客の急所めがけて投げ防戦した。

部屋の外で待機しているゴウザと南侯の護衛の者が、異変に気づき部屋になだれ込んだ。

「曲者！逃すな！」

護衛長の声が響く。

刺客側にとって事の成功は、時間にかかっていた。踏み込んでから、一瞬で事を成し遂げなければならなかった。救援がかつけられるまでが勝負だ。救援がきた以上、引くしかない。

南侯を暗殺しようとする集団だ。そうやすやすとしつぽを巻かなかった。侵入口のバルコニーから夜の町に消える直前、振り向きざまに銃を撃ちはなった。部屋には爆音の響。

標的はロゼ。

クロードはいつきにテーブルの上を飛び越し、ロゼの体を抱きかかえ横っ飛びに弾をよけた。いつものクロードなら間に合うタイミングだった。

足が本調子ではなく、最後の踏ん張りがきかなかった。ロゼを抱かかえたまま、どさりと倒れ込んで動かなくなった。

「南侯は、ご無事か」

従者の一人が青くなって、主人の所在を問うた。

「南侯はいずこに！」

従者は必死に叫んだ。

「おうおう。ここじゃここじゃ」

テーブルの下から、南侯が這い出してきた。その姿の威厳のなさといったらなかった。

クロードは、ロゼにのしかかって倒れ込んだまま動かない。

ロゼの頬に、鉄臭くて生暖かいものが流れてきた。

「クロード！」

「大丈夫だ」

クロードは苦痛に顔を歪め、起きあがった。

左の肩から、鮮血が溢れている。

出血がひどい。肩の骨も砕けたかもしれない。

ロゼは着ているシャツを裂き、止血をした。

「せつかくのシャツが台無しだ」
「寝ぼけたことは寝て言え。骨が砕けていたら、弓が引けなくなる」

おびただしい出血をしているクロードより、手当てをしているロゼのほうが今にも倒れそうな顔色をしている。唇もかすかに震えている。

いつもの余裕の欠片も、今のロゼにはなかった。

「俺にとつて、ルーペンスの土地は鬼門なんだろうつか」
足を骨折して漂流するわ、肩には被弾するわ、災難が降ってわいてくるようだ。

クロードが南侯を尋ねたのは、ルーペンスと密約して手を結び、中央政権を打倒する計画だった。

エリウス侯をはじめ国元の貴族は、クロードの意見に反対だった。それほど、北にとつて南は憎むべき存在なのだ。

外国と手を組もうという大多数の意見を説得して、クロードはルーペンスを訪れた。南侯が首を縦に振らなかつた場合、クロードは海外の強国に力を借りなければならなくなる。

それ以外、貧しいエリウスの民を救つてだてはないのだ。南侯は、クロードが想像していた人物と、どうも違っていた。エリウスの運命を託すには足りない人物に思えてならない。

クロードの頭に、ロゼの顔が浮かんだ。

ロゼは、被弾したクロードの手当てをした。適切な処置がなされ、順調に回復している。素人判断でも、ロゼが一流の医学の心得があるのがわかる。優秀な医師としての顔を持つロゼ。

かと思えば、普段のロゼからは想像できないくらい、クロードが被弾したときは動揺していた。出血しているクロードより、ロゼのほうが今にも倒れそうな顔色をしていた。

治療する指先もかわいそうなくらい震えていたし。震える唇を必死に噛んで治療していた。

ロゼがあまりに痛々しくて、肩の痛みなど感じなかったくらいだ。

腕が自由なら、あの細く痛々しい体をおもいつきり抱きしめてやりたいと思った。

ロゼはルーペンスの町から帰って、ずっと考え込んでい

た。

南侯が頼れないと判断したクロードがたどる道は、海外の強国だ。

浜辺に打ち上げられたクロードを発見したとき、ロゼは彼の懐から二通の書状を抜き取った。

一通は南侯あて。もう一通は、海外の強国の一つが記されていた。その二通の書状は、ロゼの書斎の引き出しに眠っている。

大陸の国々は、ライス国の混乱に乗じて、この国を食いものにする隙を狙っている。政府が弱体化している今、大陸に隙をみせるわけにはいかない。かろうじて保っている均衡を、クロードは傾けようとしている。

クロードがエリウスの民を思い涙するのも、この国があつてこそなのだ。

ライス国政府が栄華をむさぼるのも、この国があつてこそなのだ。

海外の列強の国々に、この国を食いものにされなければならぬのだ。

クロードが南侯を頼れずと判断し大陸に渡る決心をしたならば、ロゼは見過ごすことができない。

クロードの味方することはできない。

心に迷いが無いといえ、嘘だ。つい私情に走ってしまった。そうになる。ロゼは、自分の気持ちを制御できなくなっている。

「ビーー。これって恋っていうやつだろうか」

ロゼは、愛犬の背中をなでながら呟いた。

「くうーん」

「恋するってのは、私の長年の憧れだったのだけど、苦しいね。これが恋っていうなら、恋などしたくなかった」

苦しいというロゼの表情を見れば、ただ苦しいばかりでもなさそうだ。その表情には、一片の後悔もない。

クロードが帰国を申し出たのは、それから数日が経つてからのことだった。

まだ足の傷さえ完治していない。杖を使って歩けるといった程度なのだ。肩の傷にいたっては、抜糸もすんでいない。

「できるだけ急いで、船の手配をしましょう」

「世話になるばかりで、本当にかたじけない」

「北に帰ったあと、どうなさるおつもりですか」

ロゼは、クロードの身のふりかたに興味があった。

「もう一度密書を持って南侯をくどいても、結果は同じような気がする」

クロードの言うとおりだ。

南の方針としては、内乱は好まずという方針なのだ。

「外国の助けを請うのは気がすまないが、それしか方法がなければ、そうしようかと考えている」

南侯が駄目なら外国にとというのは、当初の予定通りの行動だ。しかし、この離島での滞在で、クロードの考えに変化が芽生えた。

クロードは、ロゼが恐れていた結論に思い至ったようだ。

「南侯のように、もっと早くから確固たる国造りに取り組んでいたらと悔やまれる。

理想を語るには、我々には時間がない」

血を吐き出すのではないかと思うくらい苦しげに、クロードは言った。

灯りも入れず、ロゼは暗い書齋で一人考えごとをしていた。考えるまでもなく、結論は出ている。ただ、実行する決心がつかずにいるだけだ。

この国の将来のために、クロード葬るべし。

クロードは、この国にとって、災難の種を蒔こうとしている。災いの元は、早めに断つべきなのだ。

ロゼは今日ほど、自分の立場を恨めしく思ったことはない。

子を生すこともない自分に未来はないと思えば、飄々と生きてこられた。

この世になんの未練もない。

これも運命。ルーペンスの公人として人生をまっとうするの、生まれた意味だと思っていた。

そこに、クロードが現れた。

クロードを思うと、未練が生まれた。絶ちきりがたい未練だ。

「ロゼ様、灯りも入れず、どうされました」

「ああ、もうこんなに暗くなってしまったのか」

ゴウザが、ランプに火を入れた。

「船の準備が整いました。明日にでも、出発できます」

「ありがとう。急がせてしまって、悪かった」

「クロード殿が帰られると、淋しくなりますな」

ロゼ様ときたら、仕事が手につかぬほど、クロード殿にかかりきりでござりましたからのお。

ロゼ様は公務をほったらかしだと、ノウザン殿が愚痴をこぼしておりましたぞ」

「長年休まず働いているから、たまには休暇をもらわなくては」

「あちこちの部署から、ロゼ様の指示を仰ぐ書状が山のようにならなくなっておりますぞ」

「私でなくてもわかることは、ゴウザがやってくれてるのだろ」

クロードが感じたように、「ゴウザはただの下僕ではない。」「クロードが以前、家臣にならないかと誘っていたね。」

不具の私に仕えても、いつまでたっても日陰者だ。ゴウザほどの腕をこのまま埋もれさせておくのは忍びない。

クロードはなかなかの男だ。彼の右腕になって活躍すれば、立身出世も夢ではないと思う」

ロゼは、心にもないことを言っているわけではない。若いころゴウザは、右に出るものがないといわれるほどの武人だったと聞く。それが先の南侯の命で、ロゼの下僕のように勤めることになって二十五年。

武人として活躍できる時間は、あまり残されていない。ロゼはそんなゴウザを、ずっと不憫に思っていた。

「本気でおっしゃっておられるなら、このゴウザ、ここで腹をかっさばいて果てますぞ」

武勇はダテではないと思わせるゴウザの迫力に、さしものロゼも圧倒された。

「それとも、クロード殿の力になれとの、ご命令ですか」「ロゼは自分でも気づかなかったが、心のどこかでクロードを助けてあげたいと思っていたのだと気づく。

今夜、この手で殺めようと思っているのに。
ロゼの瞳から、涙がこぼれた。

送別の晩餐にと、ロゼはアルコール濃度の高い地酒をクロードにすすめた。

クロードは、酒には強い自信がある。すすめ上手なロゼにかかっては、ひとたまりもなかった。知らないうちに杯を重ね、したたか酔ってしまった。

ベットに潜り込む足取りも、おぼつかないほどだ。
クロードが寝静まったところをみはからって、ロゼは彼に

あてがっている部屋を訪れた。

月明かりが窓からこぼれ、灯りがなくても目が慣れれば部屋の様子がわかる。

移動椅子のネジには油をたっぷり注し、音がきしまないようにしてある。

月明かりでは、クロードの顔がはっきりと見えないのが残念だ。数分後には、ロゼが初めて恋した男は、骸と化してしまふ。

冷たくなったクロードは、二度と再びロゼに微笑むことはないのだ。ロゼと語らうことはないのだ。

ロゼはいつも携帯している、巧妙な飾り細工が施された細身の短剣を取り出した。

少しでも苦痛が少ないように、一思いに頸動脈を切り裂こうと思っている。

ロゼは意を決し、クロードの首に短剣をひらめかせた。

クロードの首を切り裂く手応えはなく、逆に右手首を首が折れそうなくらいひねられた。

ロゼの右手から、短剣が落ちる。

暗い部屋のなかで、クロードの視線がロゼを射すくめた。

ロゼはごくりと生唾を飲み込む。喉仏が月明かりに照らされ、妙に美しい。

ロゼは観念して抵抗はせず、クロードの視線から目をそらした。

「もつと確実な方法が、いくらでもあつたはずだ」

クロードの言つとおりかもしれない。

「何故こんなことをと聞いても、答えてはくれないだろうな。」

力加減ができなかった。手は、大丈夫か」

殺されかけた人間が、相手の心配もあるまいに。

「明日は早い、今度こそ静かに寝かせてくれ」

クロードはなにこともなかったように、布団を被り壁のほうを向いてしまった。

「そのお顔では、失敗でしたね」

「どんな顔をしてる？」

「へびを丸ごと飲み込んだような、お顔ですな」

ゴウザの表現はめっちゃくちゃのようで、案外的を得ている。

予測はしていたが、やはりクロードを殺すことができなかった。

クロードの言うように、本気で殺そうと思えば、他にいくらでも確実な方法があった。

恋をすると、人は愚かになってしまふ。ロゼとて同じだ。

ついに旅立ちの日。

クロードは、打ち上げられたのと同じ浜辺の棧橋から、北へと帰って行く。

出会いの日と同じで、ロゼはるばのヨウに乗り、見送りに来ている。

「ルーペンスまで見送りたいけど、今日はやることがあるから、ここで……」

笑顔で見送ろうとするロゼの頬が、微妙にひきつっている。

「俺と、一緒に来ないか」

クロードは、なんの脈絡もなく突然なことを言った。

ロゼの後ろで、ゴウザがぎょっと目をむいている。

さすがのロゼも、急には言葉が出ないでいる。

「しっかりした者をつけてあります。心配せずとも、無事にお送りします」

ロゼはクロードの誘いを、そんな一言でかわした。

「あの者、本当に油断も隙もござらん」

屋敷に帰ってから、ゴウザがこぼした。

「ロゼ様が真の南侯と知らずとはいえ、言っているいいことと悪いことがござります」

ロゼが南侯だとクロードには明かさず、二人は別れた。

しかし、クロードは気がついていないはずだと、ロゼは確信していた。

ゴウザの憤慨を聞き流しつつ、ロゼはどこか吹っ切れたように清々しく微笑んだ。

諜報によれば、クロードが帰路の船上にいるころ、エリウス内部に政変が起こった。

南侯や海外と密約を結ぼうとする改革派は一掃され、保守派が政権を握ったらしい。

ロゼは、クロードの乗る船に伝書鳩を飛ばした。しかし、クロードからは、なんの返事もなかった。

クロードの性格からして、同志を見捨てて自分だけ身の安全を考えるわけがい。

その後、真の南侯ロゼは、物の怪に取りつかれたように

仕事に没頭した。

そうすることでは、なくした恋を埋めることができな
いかのように。

ロゼの働きのかいがあり、ロゼが数年前から取り組んで
いた、完全銃装備の南侯軍が編成された。同時に、砲弾搭
載の海軍も編成された。

当時、中央政府軍とて、銃はまだ数えるほどしか装備さ
れていない。

圧倒的武力の差で中央政府を制圧するというのが、ロゼ
のかねてからの構想だった。

そうすることで、犠牲を最小限にとどめることができる
からだ。そして、海外の強国とも、渡り合える力を持たな
くてはならない。

ロゼの構想が実現することが、ひいてはクロードが大切
に思うエリウスの民を救うことになると思っている。

どんなに急いでも、後四年はかかるといわれていた計画
を、二年足らずで成し遂げてしまった。

その間、ロゼは不眠不休の毎日を送った。

武力に武力で応じる。ロゼの理想ではない。

ロゼの理想は、民の質の向上。民が力を合わせ、本当の平
和を勝ち取ることだと思っている。しかし、それはもう少
し先の時代のことになるだろう。今、自分が生きているう
ちにできることをやるしかない。

一世一大の大仕事を成し得たロゼが、一番最初に思った
ことといえば。

クロードとの出会いが、後二年遅かったらどうだっただ
ろうと思う。いまなら、すべての柵を捨てて、クロードに
ついて行けただろうか。

南侯が全国の覇者になったのを機に、ロゼは南侯の座を
退いた。

二十七歳にして、隠居生活を送っている。

政権から身を引くことが、ロゼのたつての希望だったか
らだ。

クロードと過ごしたのは、一ヶ月にも満たない短い日々
だった。この先どれくらいか長いのかかわからない一生
を、その思い出だけを心の支えに生きていくのだ。

ロゼは最近では、あまり笑わなくなった。必要以上に、
話もしなくなつた。

クロードに「一緒に来ないか」と誘われたとき、もしか

したらロゼが行ってしまうのではないかと、ゴウザは思った。

ロゼが南侯として、そんなはやまったことをするはずがないと思いつつも、そう思ってしまった。

ロゼの判断に胸を撫で下ろしたゴウザだが、いまではあのときの判断は間違っていたのではないかと自問する。

あの日あの浜で、ロゼの背中を押してあげていれば、ロゼの今はどうだろう。考えてもせん無いことと、年よりの目に涙が滲む。

ロゼは暇さえあればヨウに乗り、屋敷の裏の浜辺を散歩する。日中一日暇なわけだから、要は一日中浜辺にいるのだ。

クロードと出会った浜だ。そして、別れた浜でもある。見送るゴウザは、その後姿がいつも不憫でならない。

一艘の船が、棧橋に入ってきた。

立派な体格の青年が、ロゼに向かって手を振っている。

見間違うはずがない。

「クロード！」

ロゼは喉が破れるほど、大きな声で愛しい人の名を呼んだ。

ろばのヨウの足は遅い。韋駄天のように駆けていきたいのに、思うようなスピードがでない。

気持ちばかりがせいて前つめりになったロゼは、ヨウの背から落ちてしまった。

砂浜に放り出されたロゼは、思いどおりに動かない体が恨めしかった。

「ロゼ！」

船から降りたクロードが、ロゼに駆け寄った。

「久しぶり」

二年前より一段と遅くなったクロードが、ロゼを抱き上げた。ロゼのほうは、二年前より、二周りは小さくなっている。

衣服の下に感じる予想外の、ロゼの下肢の細さに、クロードはどきりとした。力強く抱きしめたら、折れてしまいそうだ。

クロードの逡巡を、自分の体の醜さにだと、

ロゼは勘違いした。抱かれているのが、恥ずかしくなった。

「ヨウ」

ロゼはヨウを呼び寄せた。ヨウが背中に乗るように催促

したが、クロードはロゼを離さなかった。

「離さない」

クロードは、抱いているロゼの首に顔を近づめて言った。

「嫌だと言っても、離さないからな」

二年ぶりにやってきたクロードの、あまりにも大胆な告白だった。

いま二人は、北へと向かう船の甲板にいる。

「まだルーペンスみたいにはいかないが、エリウスもだいぶ豊かになってきた。慣れるまでは、寒いかもしれない」

「あのとき、クロードが外国と手を結ばずに、エリウスの復興に力を注いでくれたことに、本当に感謝している」

「南侯には、いろいろとご教授いただいたからな」

「私は、別に…何も。それに今は、南侯ではない」

「ロゼはいつから俺がエリウスのクロードだと気がついた？」

スイメイ亭で、俺のことクロードと呼んだよな」

「ノウザンから聞いたので…」

と、ごまかした。まさか最初からとは言えない。

クロードは、ノウザンに自分が弓の名手だとは話していない。なのにクロードが被弾したとき、ロゼは弓が引けなくなるかと心配していた。だから、ロゼの言葉は信じていなかったが、それ以上追求するのはやめた。

「クロードは、いつ私が南侯だと、気がつきましたか？」

同じ質問を、今度はロゼがした。

「おかしいなと思ったのは、スイメイ亭で襲われたとき」

後で冷静に考えれば、刺客が狙っていたのはロゼだったのではと、疑惑を持った。

「確信したのは、旅立ちの前夜」

ロゼに命を狙われた。

「ロゼが俺を殺さなければならぬ理由を考えた。

恋しい男と離れたくないからだとか」

クロードのあまりに包み隠さない物言いに、ロゼは赤面する。

「お互い、人が悪いってことで、お相手だな」

「では、『一緒に来ないか』というのは、口からでまかせだったのですね」

ロゼはその言葉を思い出しては、何度涙したことか。

「でまかせなんかではない。本当に、一緒に来てほしかったんだ。」

ロゼに会っているんなことを学んだ。外国の力を借りるのが、本当に良策なのか。答えは、否だった。だから、俺はエリウスに帰って国を建て直そうと思った。めどがつかたら、迎えにこようよ。

頭では冷静に考えていたのだ。

なのに、いざ別れとなると、離れたくなかった。駄目もとで誘ったが、やっぱり振られた」

クロードに抱かれているロゼは、彼の肩に顔をこすめた。ゴウザに抱きかかえられているロゼの姿が、クロードの目に焼き付いている。二年たっても、クロードの頭から、その残像が消えない。ゴウザには、触れさせたくないという明確な嫉妬心を感じていた。

クロードの願いどおり、ロゼはクロードの腕の中にいる。クロードの足元には、老犬ビィーが大きな体を伏せて座っている。

そして、ゴウザもヨウも、この船に乗って北に向かう。

鳥の群れが、青空を渡っていく。

ロゼはクロードに抱き上げられ、幸せそうに海を見ている。

「あの歌を歌ってくれ」

「ああ…あれですか。」

マイ スウィート ラバァー

レエツ メーク ラブ…

頬にあたる風も、二人を祝福してくれているように暖かだ。

おわり

『黎明の浜』 酒盛日和 著

sakka.org